道徳教育

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた道徳科授業の在り方に関する研究
～小学校５・６年生複式学級における授業実践を通して～

十島村立平島小学校　教諭　堀之内　利成

【推薦のポイント】

○　本論文は，「問題意識をもつ」「自分との関わりで考える」「多面的・多角的に考える」「自己の生き方について考えを深める」の点から指導を工夫改善することで，道徳科における主体的・対話的で深い学びの実践を目指した，価値ある論文です。

○　特に仮説を検証するため，導入，交流活動，発問，思考ツールの活用と教具の工夫，板書の工夫など，多方面からこれまでの指導を見直し成果に結びつけています。
　また，同一設問による調査を年度当初と論文作成時の２回実施し，その結果を比較・分析することによって児童の変容をとらえている点も，客観性のある実践・成果を裏付けていることが分かります。

目　　次

1　研究主題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
(1)　教科化の背景と求められる道徳科の授業の在り方
(2)　これまでの道徳科授業実践における省察
(3)　道徳科における「主体的・対話的で深い学び」について
(4)　本学級の児童の実態から
(5)　本校の研究との関連から
(6)　本研究のねらいと仮説
(7)　研究構想図

3　研究の実際・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
(1)　【授業実践①】の内容
(2)　【授業実践②】の内容

4　研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
(1)　研究の成果
(2)　今後の課題

5　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

○　参考・引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

１　研究主題

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた道徳科授業の在り方に関する研究

～小学校５・６年生複式学級における授業実践を通して～

２　はじめに

（１）教科化の背景と求められる道徳科の授業の在り方

今日の社会は，生産年齢人口の減少やグローバル化の進展，AI やロボティックス，ビッグデータといった絶え間ない技術革新等により，社会構造は大きく急速に変化し，予測困難な時代を迎えていると多方面で言われている。また，次期教育振興基本計画のコンセプトの中に，「2040 年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」と記されており，主体性や課題発見・解決力，表現力等を備えた人材の育成が求められている。このような背景を踏まえて，今後，さらにグローバル化が進展していく中で，様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きることや，科学技術の発展や社会・経済の変化の中で，人間の幸福と社会の発展の調和的な実現を図ることが一層重要な課題とされている。このような課題に対応していくためには，社会を構成する主体である一人一人が，高い倫理観をもち，人としての生き方や社会の在り方について，時に対立がある場合を含めて，多様な価値観の存在を認識しつつ，自ら感じ，考え，他者と対話し協働しながら，よりよい方向を目指す資質・能力を備えることがこれまで以上に重要となる。こうした資質・能力の育成に向け，道徳教育は大きな役割を果たす必要があると言われている。

このような状況を踏まえて，平成 27 年 3 月に小学校及び中学校の学習指導要領等が改正され，各教科において「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められ，道徳教育においては，小学校は平成 30 年度から，中学校は平成 31 年度から「特別の教科 道徳」が全面実施された。教科化になる前においても「道徳の時間」が，道徳教育の要としての役割を果たし，社会を構成する主体である一人一人の資質・能力を育成してきたことは明らかである。「特別の教科 道徳」が全面実施される以前の実践研究や教育書等を概観すると，各学校において，学校や児童生徒の実態や課題に基づき，創意工夫された実践が多く行われ，確固たる成果を上げてきた。平成 27 年 3 月に学習指導要領等が改正された中で，「道徳の時間」がなぜ「特別の教科 道徳」へと教科化されたのか，主に以下のことが背景にあると考えられる。

【「道徳の時間」から「特別の教科 道徳」になった主な背景】

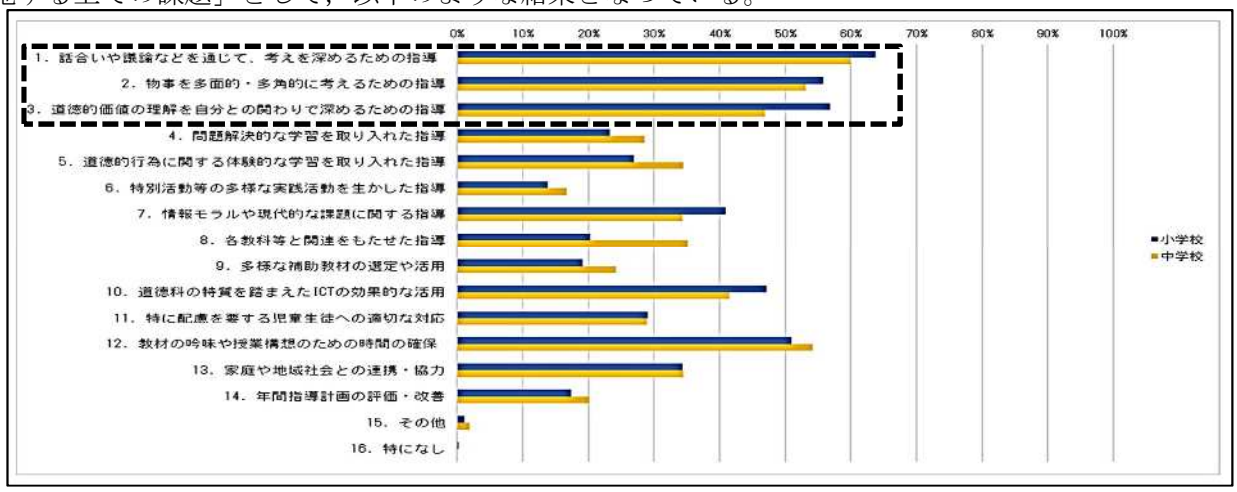
- 道徳教育そのものを忌避しがちな風潮が存在している。
- 他教科に比べて軽んじられている。
- 主題やねらいの設定が不十分な単なる生活経験に関わる話合いや読み物の登場人物の心情を追い，心情理解のみに偏った形式的な指導が行われる場合がある。
- いじめの問題等，現実の困難な課題に主体的に対処することができない。
- 望ましいと分かっていることを言わせたり書かせたりすることに終始する学習指導がある。

このような背景の中で，子供が道徳の学習の意義を理解していなかったり，登場人物の生き方や考え方を自分事ではなく，他人事としてしか考えられなかったりしたのではないかと考えられる。そのため，子供自ら課題意識をもち，道徳的価値について他者と対話し深めながら，より自己の生き方について考える道徳の時間へと質的転換を図っていく必要があるという結論になったのではないかと考える。

「特別の教科 道徳」(以下，道徳科と記載)と位置付けられたことにより，目標が「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため，道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，

心情，実践意欲を育てる。」となった。

これらの背景を踏まえると，これから目指す道徳科の授業においては，学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育と，その要としての道徳科の役割を明確にしていく必要があるとされた。そして，子供の発達の段階に応じて，答えが一つではない道徳的な課題について，子供一人一人が自分自身の問題であると捉えながら，主体的に道徳性を養っていくために，学習指導過程や学習方法を工夫・改善しながら「考え，議論する道徳」の授業へと質的転換を図っていくことが求められた。道徳科の授業についての質的転換が図られ，ねらいとする道徳的価値について自分との関わりで主体的に考え，互いの価値観を交流し合うことで自分の価値観を深め，新たな見方や考え方等を生み出していく授業が求められてから，貴重な実践が多く積み重ねられている。しかし，令和４年３月に文部科学省が報告している「令和３年度道徳教育実施状況調査」の結果を概観すると，「道徳科授業を実施する上での課題」として，以下のような結果となっている。



【図１「令和３年度道徳教育実施状況調査」〔設問 6〕「道徳科授業を実施する上での課題」結果】

図１のように，「主体的・対話的で深い学び」に関わることについて，調査対象である過半数の小学校において課題と感じている結果となっている。特に，「話合いや議論などを通じて，考えを深めるための指導」においては，60％を超える結果となっている。無論，執筆者も同様の課題意識を抱きながら，日々の教育実践に取り組んでいるのが実情である。

（２）これまでの道徳科授業実践における省察

これまで，研究授業の機会をいただいたり各教科における校内外の研究授業を参観したり，教育実践報告を読む等を通して，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた道徳科の在り方や学習指導方法について模索している。特に，本校のような実態である極小規模校における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学習指導の在り方については，様々な課題を抱えている。これまでの道徳科授業実践について振り返ってみると，以下のような課題が明らかとなった。

【道徳科の授業実践における主な課題】

◇事前アンケートを活用した授業を行っているが，学習者自身が「考えたい」「深めたい」と思うような，学習者主体の視点に立った授業づくりが不十分である。⇒**共通した課題設定の場**

◇学習活動の中に対話活動を位置付けているが，意見や考えを伝え合うだけに留まってしまい，互いに質問したり多様な考えに出会う場面設定が不十分であったりすることから，自己の考えを深めるまでには至っていない。**⇒発問の工夫・対話活動場面の焦点化**

◇展開前段における学習活動の精選ができずに，展開後段で学習の振り返りや自分のこれからの生き方について考えることが不十分である。**⇒学習活動の精選・ねらいの明確化**

◇授業の中で児童の何を，どのように見取るべきか，道徳科の評価についての観点が明瞭でなく，客観的な授業の省察が必要である。**⇒事前・事後の変容を見取れるワークシートの工夫**

◇少人数における対話活動の在り方を明確にする必要がある。**⇒人材活用・他校との遠隔授業**

上記のような課題については，勤務校全体に目を向けても各教科において概ね共通しており，どの教科も「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組んでいる。また，十島村内の先生方と日頃の実践について情報共有する中でも，共通して困り感を抱いているものもある。いわば，「子供たちに求められる資質・能力を育成するために解決すべき喫緊の課題」として捉え，様々な実践を積み重ねながら成果と課題を明らかにし，課題解決に繋がるものを得ようと様々な工夫を凝らした授業実践に取り組んでいる。このような実情について課題解決を粗放すると，子供たちに必要な資質・能力を備えないままとなり，これらのことが，本研究の端を発している背景の一つである。

（３）道徳科における「主体的・対話的で深い学び」について

ア　道徳科における「主体的・対話的で深い学び」の捉え方

道徳科の目標の中に記された学習活動に着目すると，「道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習」とされており，これを主軸に捉えていかなければならない。すなわち，道徳科で求められている「考え，議論する道徳」を実現することは，「主体的・対話的で深い学び」を実現することになるのである。これを踏まえて，以下に，道徳科における「主体的・対話的で深い学び」の捉え方について表 1 に示す。

【表１　道徳科における「主体的・対話的で深い学び」の捉え方】

主体的な学び	学習者自らが問題意識をもち，自己を見つめ，道徳的価値を自分自身との関わりで捉え，人間としての生き方について考える学習とすることや，各教科で学んだこと，体験したことから道徳的価値に関して考えたことや感じたことを統合させ，自ら道徳性を養う中で，自らを振り返って成長を実感したり，これからの課題や目標を見付けたりすることができる。
対話的な学び	学習者同士の協働，教員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えたり，自分と異なる意見と向かい合い議論すること等を通じ，自分自身の道徳的価値の理解を深めたり広げたりすることができる。
深い学び	道徳的諸価値の理解を基に，自己を見つめ，物事を広い視野から多面的・多角的に考え，人間としての生き方について考える学習を通して，様々な場面，状況において，道徳的価値を実現するための問題状況を把握し，適切な行為を主体的に選択し，実践できる。

イ　「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた道徳科の授業づくりを進めるにあたって

本研究では，道徳科における目標と「主体的・対話的で深い学び」の視点，これまでの授業実践で明らかとなった課題，極小規模校の実情を基に，「問題意識をもつ」「自分との関わりで考える」「多面的・多角的に考える」「自己の生き方について考えを深める」の 4 点の学習活動において指導の工夫・改善を行うことにより，極小規模校における道徳科の「主体的・対話的で深い学び」の授業の在り方について検討でき，改善を図ることができるのではないかと考えた。

（４）本学級の児童の実態から

【表２　第１回目　「道徳科授業に関するアンケート」　令和５年４月 17 日(月)実施】

(4：よくあてはまる　3：あてはまる　2：あまりあてはまらない　1：あてはまらない)

質問項目	A 児	B 児	C 児
1.道徳科の授業で，自分の考えや意見を発表することが好きですか。	3	4	2
2.道徳科の授業で，話し合いをするのが好きですか。	3	4	2
3.道徳科の授業では，新たな気付きがあると感じますか。	4	4	3
4.授業の中でよく考え，自分の考えをもつことができていますか。	4	4	4
5.自分の考えを，みんなに伝えることができていますか。	3	4	3

6.友達の意見を聞いて，考えを深めたり広げたりすることができていますか。	4	4	3
7.これから，自分はどうしていきたいか考えることができていますか。	3	4	3

本研究の実践および道徳科研究授業を行うにあたり，実態把握ならびに本研究の検証をすることを目的とし，4件法を用いた自作の道徳科授業に関するアンケートを行った。

本学級は，小学5年生が1名，小学6年生が2名の計3名が在籍する複式学級である。表2は，第1回目「道徳科授業に関するアンケート」のA児・B児・C児の結果である。この結果から，道徳科授業においては，自分の意見や考えを発表することがあまり好きではないと回答する児童が1名いることから，自分の意見や考えを発表することを前向きに取り組むことができるようにする必要がある。また，道徳科授業において話合いをすることがあまり好きではないと回答する児童が1名いることから，授業のねらいや解決したい課題，どんなことを考えていきたいか明確にし，話合いの場を設定する際に，目的意識や話し合う内容も明確にする必要がある。道徳科の授業において，よく考えて自分の考えをもつことができているということが明らかである。しかし，話合いをすることに苦手意識を抱いていたり，授業を通して新たな気付きがあると感じていなかったりするのが実態である。また，互いの意見や考えを聞いて，より考えを深めたり広げたりすることができ，これからの生き方について考え，道徳的実践意欲をもつことができるようにする必要もある。

このような実態から，極小規模校で過ごしている子供たちに，道徳科の学習に主体的に取り組み，道徳的な課題について自分との関わりで考えさせ，道徳的価値について多様な意見や考えと出会わせながら多面的・多角的に考えて，これからの自己の生き方について考えさせることができる授業の在り方について検討したいと考えた。そして，子供たちが，多様な価値観の存在を認識しつつ，自ら感じ，考え，他者と対話し，よりよい方向を目指す資質・能力を備え，ありのままの自分を大切にしながら他者と協働し，未来を歩み進めてほしいと考えた。これらのことに加え，昨年度の教育実践を踏まえ，極小規模校における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた道徳科授業の在り方について，研究及び実践をしていきたいと考えた。

（５）本校の研究との関連から

本校では，今日の教育的課題や社会的要請，教育の動向及び本校の実態を鑑み，本年度の学校教育目標を,「豊かな心と高い志をもち,自ら学び,自分らしくたくましく生きる児童生徒を育成する」と定めている。そして，これまでの研究で明らかとなった成果や課題を踏まえて，本校では「他者と協働しながら，未来へ進む児童生徒の育成～「伝える」,「受け取る」を核とした授業実践を通して～」を研究テーマとしている。そのため，本校の研究と本研究は合致していると考え，本校の研究テーマと関連させた研究を行い，極小規模校の実情を踏まえて「主体的・対話的で深い学び」の授業を目指すよりよい手立てを検討したいと考えた。

（６）本研究のねらいと仮説

本研究では，2 つの授業実践を基に「問題意識をもつ」「自分との関わりで考える」「多面的・多角的に考える」「自己の生き方について考えを深める」の4点の学習活動において，指導の工夫・改善を行いながら「主体的・対話的で深い学び」を目指す道徳科授業の在り方について検討し，子供たちの道徳性を育むことを主たるねらいとする。

【仮説①】（主体的に学習に取り組むための工夫）

> 導入や発問の工夫をし，個に応じた指導の充実を図ることで，道徳的価値をより理解でき，道徳的な課題を自分の問題だと捉えながら，主体的に学習に取り組むことができるであろう。

仮説①においては，導入部分で教材を通して何について考えたいか共有する場の設定や事前アンケートの結果を示しながら道徳的価値に迫り,問題意識をもって主体的にめあてを立てやすくする。

【仮説②】（活発な対話活動を実現し，自他の意見や考えに触れながら考えを深めるための工夫）

> 対話活動を行うねらいを明確化したり,より多くの他者と対話し多様な意見や考えと出会う場を設定したりすることで，自分の考えを広げたり，深めたりすることができるであろう。

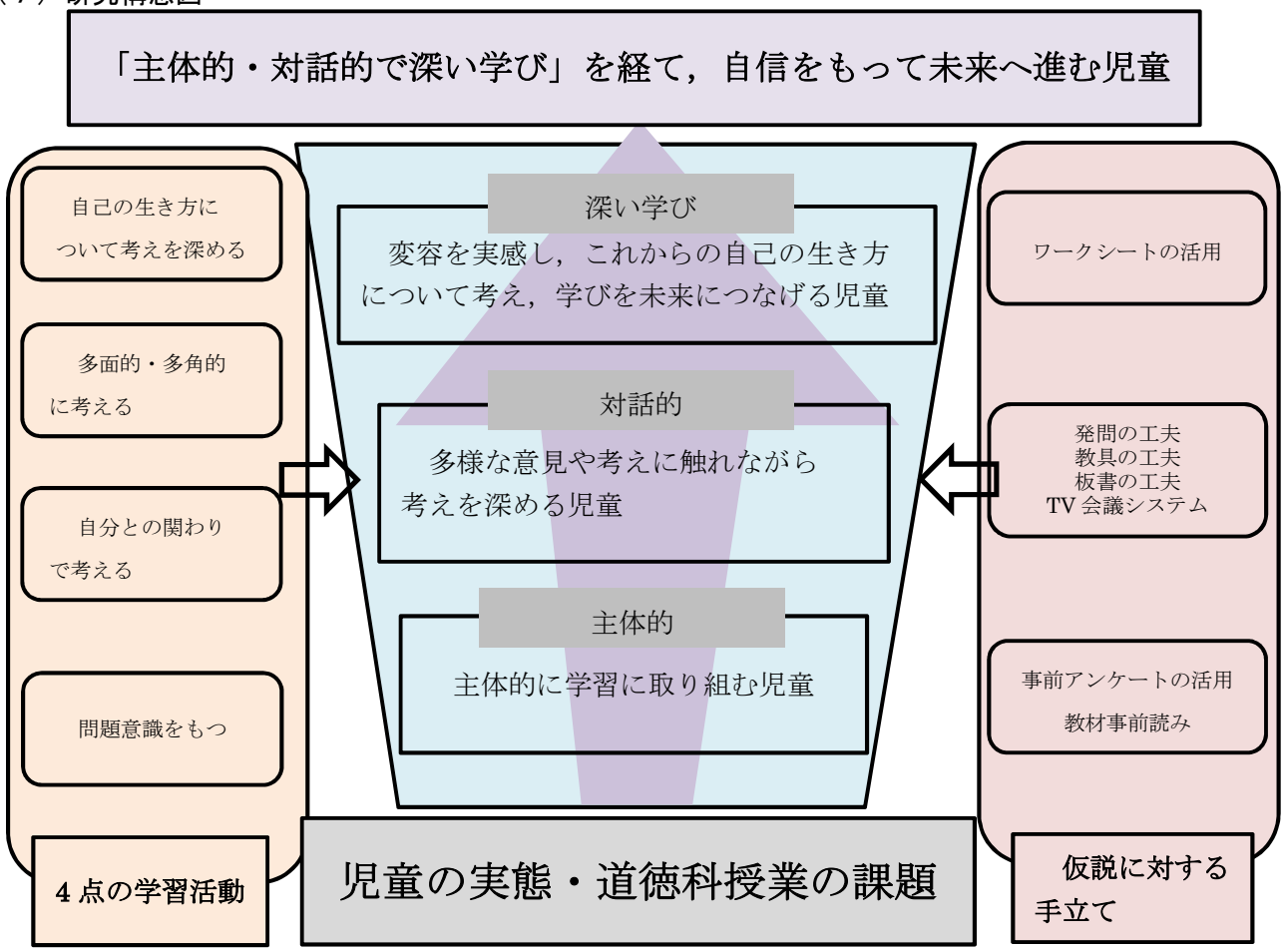
仮説②においては，他島の小学校と TV 会議システムを活用した合同授業を行ったり級友以外の人と対話活動を行う場を設定したりし，多面的・多角的な意見や考えに触れる機会を設ける。また，意図的・計画的な「問い返し」や「ゆさぶり」の発問を行いながら，単に受け答えするやり取りに留まることがなく，自己内対話を促し，自分の意見や考えを深めながら表現しやすくする。さらに，思考ツール活用や考えを可視化する教具を用いて，他の人の見方，考え方と比較しながら自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考えられるようにする。

【仮説③】（これからの生き方について考え，学びを未来の自分につなげるための工夫）

振り返りの時間を十分に確保したり，事前・事後の変容を見取れるワークシートを活用したりすることで，これまでの自分自身を振り返り，自己の生き方について考えることができるであろう。

仮説③においては，学習活動の精選を行いながら，展開後段ならびに終末において，教材から離れて自分自身について見つめる場を設けて，子供たちが板書を見ながらワークシートを活用して学習内容と事前・事後を振り返ったり，これまでの自分自身を見つめ直したりすることができるようにする。

（７）研究構想図



３　研究の実際

（１）【授業実践①】の内容

ア　教材名「手品師」(小学どうとく生きる力６　日本文教出版)

イ　道徳科内容項目　「誠実に明るい心で」

ウ　ねらい　男の子との約束を守った手品師の姿から，夢と約束の間に立たされ迷った理由について追究する活動を通して，誠実についての理解の幅を広げ，常に誠実に行動し，明るい生活をしようとする心情を育てる。

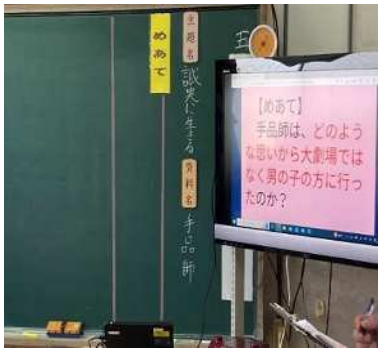
エ　本時の実施

学習過程	主な学習活動と内容	具体的な支援・手立て （◆仮説の手立て）
問題意識をもつ	1　教材「手品師」を読んだ内容を踏まえて，話し合いたいことを決める。 ・大劇場に立てるチャンスがあったのに，なぜ断ってしまったのだろうか。 ・手品師は迷ってしまったのだろうか。	◆　学習を方向付けるために，ロイロノートにまとめたものを提示する。【タブレットの活用】 ○　「手品師の夢である大劇場で手品を披露する機会をどうして断ったのだろう」と問うて，ねらいとする価値へ方向付ける。
	なぜ，手品師は自分の夢よりも男の子の約束を優先したのだろう。	
自分との関わりで考える	2　手品師の状況を全体でもう一度把握する。 ・うではいいがあまり売れない手品師 ・暮らし向きは楽ではない ・パンを買うのもやっとというありさま	○　挿絵と短冊を提示し状況をおさえる。 ○　内容を捉えやすいように，キーワードとなる文を板書上に貼る。
多面的・多角的に考える	3　手品師の葛藤場面を中心に話し合う。 （1）大劇場で手品を披露することを優先した時と男の子に手品を披露することを優先した時のメリットとデメリットについて考える。 （2）手品師の立場になり，自分だったらどうするか考える。 大劇場　　男の子 2　1　0　1　2 （3）手品師は心の中で何を大切したのか考える。 ・正直　・約束を守る　・大切な約束	○　全体でそれぞれを優先した時のメリット・デメリットについて視覚的に捉えやすいように板書する。 ○　共感しながら出された考えを板書する。 ◆　心のものさしを活用し，自分だったらどうするか考えさせ，自己内対話したことを視覚化する。 ◆　「もし自分が手品師だったら，大劇場に立つことを優先する？男の子との約束を優先する？」と全体に発問する。 ○　意欲をもって考えたり級友と話し合ったりしている。 ◆　思考ツールの「ピラミッドチャート」を活用して，手品師が心の中で誠実に生きるために優先した思いを視覚化する。【タブレットの活用】
自己の生き方について考えを深める	4　本時の学習を振り返り，これからの自分の姿を描く。 （1）手品師は自分の夢よりも男の子との約束を優先した理由について，自分なりのまとめを書く。 ・大劇場で披露しても男の子のことが気になりモヤモヤした気持ちが残る ・一度決めたことを実行するという思いが強かった （2）ワークシートに今日の学習で考えたことを書き，全体の場で出し合う。 ・今日の学習の振り返り・新たな気付き ・新たな考え　・これからの自分 5　授業者の説話を聞いて，これからの実生活につなげようという思いをもつ。	○　事前アンケートの結果と本時の学習内容を照らし合わせながら，「誠実に生きること」とはどういうことか考えさせる。 ◆　誠実について理解の幅を深め，自己の生き方について見つめている。【ワークシートの記述】

（ア）　仮説①「主体的に学習に取り組むための工夫」

a　導入の工夫

導入では，事前に教材を学習者に読ませるようにした。なぜなら，事前に教材を読ませることで，どのような内容なのか把握でき，本時の中で教材の内容をおさえる時間を短縮できることはもちろんであるが，学習者一人一人が教材を通して，何を考えたいのか，どんな課題を解決したいと思うのか，自己内対話の中で設定することができる。そして，ロイロノートを活用し，付箋に書き込んだ内容を提示することで，学習者の視点に立っためあてを設定することができる。学習者が設定しためあてをTVに映し，全体で一人一人のめあてを確認しながら共通したキーワードを見いだし，「手品師の夢である大劇場で手品を披露する機会をどうして断ったのだろう」と問うて，本時の共通課題を設定した(写真1)。



【写真１　学習者が立てためあて】

b　発問の工夫

導入では，学習者の考えに共感しながら，「大劇場で手品を披露することを夢見ていた手品師に

とって絶好の機会であるのに，男の子との約束を優先するのはこれからの人生に大きく関わってくるのではないか」という問いを主軸にした。学習者は，どのような行動が誠実であるのか葛藤し，主体的に学習に取り組むことに繋がった。

（イ）　仮説②「活発な対話活動を実現し，自他の意見や考えに触れながら考えを深めるための工夫」

a　交流活動の場の工夫

【写真２　対話活動の実際の様子】

はじめに，大劇場で手品を披露することを優先したときと，男の子に手品を披露することを優先したときのメリットとデメリットについて考えを交流する活動を位置付けた。また，主人公の葛藤場面において「自分が手品師だったらどうするか？」と自我関与させて，考えたことをペアや全体で交流する場面を設定した(写真 2)。単に自分で考えたことを伝えるだけでなく，理由を明確にしながら交流するように伝えた。また，ロイロノートの中にある思考ツールの一つである「ピラミッドチャート」を用いて，手品師が大切にしていたことは何なのか，全体における対話活動や自己内対話を通して考えたことを表出し，視覚的に捉えることができるようにした。葛藤場面に焦点化したことで，誠実に生きることについて，子供は多面的・多角的に考えることができた。

b　発問の工夫

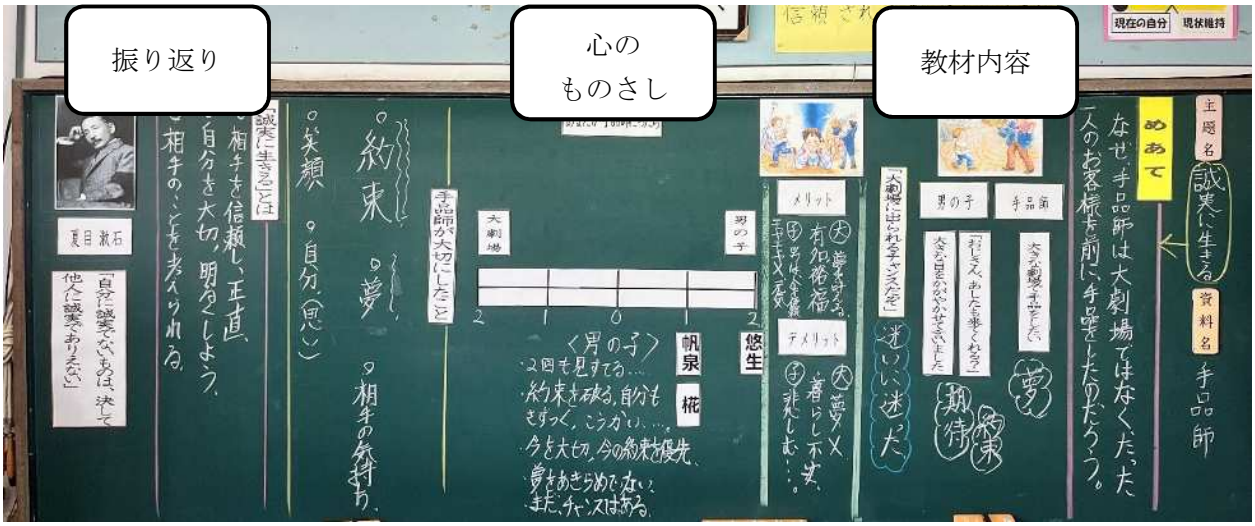
子供の思考を深めるために，主人公の思いに寄り添いながら学習を展開し，「自分の夢であったことよりも，男の子の前で手品をすることが本当に誠実な行動なのか」と，子供たちに問うた。また，子供たちの意見や考えの根拠に迫ったり，新たな疑問を生み出したりするために，「でも」「どうして」等，問い返しの発問で子供たちに問うた。子供が自分の考えを深めたり，級友の考えを踏まえて，多様な考えや価値観に触れたりするためには，授業者は綿密に発問計画を立て，計画を踏まえて子供を揺さぶり，深めさせていくことが求められている。

c　思考ツールの活用と教具の工夫

【写真３　思考ツールの活用】

授業実践①では，「自分が手品師だったらどうするか」葛藤する場面において，自己内対話で深めたことを視覚化することと，級友との考えを比較しながら深めていくことを目的として，「心のものさし」(写真 3)と「ネームプレート」を活用した。また，思考ツールを活用し，自分自身の心の中を可視化することによって，道徳的価値や道徳的な課題について，級友との考えを比較し，子供が多面的･多角的に物事を考えるための手立てになった。

d　板書の工夫

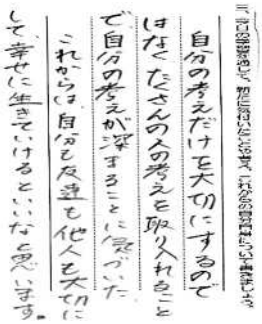


【写真４　授業実践①の板書】

板書は,「授業の内容が見て分かる板書」と「子供たちの思考の流れが分かる板書」となるように構造化された板書を毎時間意識している(写真 4)。本時の主題が「誠実に生きる」であるため,授業を通して再度「誠実に生きるとは」と考えさせ,その内容を本時のまとめとして位置付け,子供が本時を通して考えた「誠実に生きること」板書した。

(ウ) 仮説③「これからの生き方について考え,学びを未来の自分につなげるための工夫」

道徳科の授業で用いるワークシートの最後に,授業の振り返りとこれからの生き方について書くように習慣化している。振り返りの視点は,「授業で感じたことや考えたこと」「これからの自分」「新たな気付き」の 3 つを示して書くようにしている。子供たちは,道徳科の授業を通して,道徳的価値について考えたことや新たに気付いたこと,これからの自分の姿等についての記述内容が見られた (写真 5)。また,「誠実な人」について,事前は「頼りになる人」「誰からも信頼されている人」等と連想していたが,事後は「正直」や「相手のことを考える」等と変容が見られた。



【写真５　振り返りの内容】

(2) 【授業実践②】の内容(他島と TV 会議システムを活用した実践)

ア　教材名「ロレンゾの友達」(小学どうとく生きる力 6　日本文教出版)

イ　道徳科内容項目　「友情,信頼」

ウ　ねらい　本当の友達とは,何が相手のためになるのかを考え,相手を助けたり尊重したり,先を見て厳しく接したりすることができる友達であることに気付き,友達とよりよい関係を築こうとする心情を育てる。

エ　本時の実施

学習過程	主な学習活動と内容	具体的な支援・手立て (◆仮説の手立て)
問題意識をもつ	1　事前に聞かれた問いに対する答えを踏まえて,話し合いたいことを決める。 【問い】:「本当の友達とは,どんな友達か」 ・一緒にいて楽しい人 ・自分のことを理解してくれる人	◆　事前に教材を読ませ,「本当の友達とはどんな友達か」自分の考えをもたせるようにする。 ○　「本当の友達とは,どんな友達なのだろうか」と問うて,本時のねらいとする価値への方向付けを行う。
	本当の友達とは,どんな友達なのだろう。	
自分との関わりで考える	2　「ロレンゾの友達」の内容を全体で再確認する。 ・ロレンゾから手紙が届いたが,3人の友達どうするか悩んでいる ・アンドレ,サバイユ,ニコライの考え方	○　挿絵と短冊を提示し内容を押さえる。 ○　内容を捉えやすいように,キーワードとなる文を板書上に貼る。
多面的・多角的に考える	3　ロレンゾが待ち合わせ場所に来たときに,アンドレ,サバイユ,ニコライはどうするのか葛藤している場面を中心に話し合い,友達に対する考えを深める。 (1)　3人の中で誰が一番友達思いか考える。 (2)　3人の友達に対する考え方について整理する。 (3)　共通していること考える。 ・心配している　・信頼している ・無実を信じている	◆　「3 人の中で,一番友達思いなのは誰だと思いますか?」と全体に発問する。 ○　補助発問をしながら,3 人の友達に対する考え方を表にまとめて視覚的に捉えやすいようにする。
自己の生き方について考えを深める	4　なぜ,ロレンゾに会った 3 人は話し合ったことを口にしなかったのか考える。 ・疑っていたと思われ悲しむかもしれない ・無事であったから話す必要がない 5　本時の学習を振り返り,これからの自分の姿を描く。 ・ワークシートに,今日の学習で考えたことを書き,全体の場で出し合う。 6　授業者の説話を聞いて,これからの実生活につなげようという思いをもつ。	◆　事前アンケートの結果と本時の学習内容を照らし合わせながら「本当の友達とはどんな友達なのか」考えさせる。 ◆　全体の場で発表する場を設定し,本時で学んだことや新しい気付きについて共有し,考えの広がりや深まりにつなげる。 ◆　友達に関わる詩について話し,これからの自分自身の姿について考えさせる。

（ア）　仮説①「主体的に学習に取り組むための工夫」

a　導入の工夫

これまで集合学習や高学年交流授業で関わりがあったが，少し緊張した様子であった。普段よりも学習者が多いことにより，事前の問に対する考えも幅広く，多様な考えと出会うきっかけとなった。導入では，学習者が一人一人が考えた「本当の友達」について板書して整理したが，共通した考えは見られなかった。そこで，「本当の友達とは？についてはっきりと答えられる人はいますか？」と問うと，思考を巡らせている様子であったため，「本当の友達とは，どんな友達なのだろう」を本時の共通課題として設定した。

（イ）　仮説②「活発な対話活動を実現し，自他の意見や考えに触れながら考えを深めるための工夫」

a　交流活動の場の工夫

「3 人の中で誰が一番友達思いか」と学習者に問うた後，互いの考えに質問する時間を設定すると，自分の考えを伝えながらも，級友の質問に対してじっくり考えたり根拠を明らかにしたりしながら，「考え，議論する」時間になった(写真 6)。対話を行う中で考えが変わり，ネームプレートを移動する学習者もいた。

【写真 6　対話活動の実際の様子】

b　思考ツールの活用と教具の工夫

授業実践②では，ロレンゾの友達の考えが視覚的に捉えやすくするために表を活用した(写真 7)。3 人の考え方を表に整理したことで，誰が友達思いであるのか，3 人に共通しているロレンゾへの思いは何であるのか捉えやすくなり，活発な対話活動へと導くことができたと考える。思考ツールの活用や教具の工夫は，活用する意図を明確にする必要があると感じた。

【写真 7　心のものさし】

c　板書の工夫

【写真 8　授業実践②の板書】

（ウ）　仮説③「これからの生き方について考え，学びを未来の自分につなげるための工夫」

記述内容を見ると，本時のめあてに対する自分なりの考えをもつことができ，これからの自分の生き方についても考えることができていた。また，「本当の友達」について，事前は「一緒にいて楽しい」「優しい」と抽象的な内容が多かったが，事後の考えを見ると，「信じ合える関係」「今だけでなく，後先のことまで考えてくれる人」等，「本当の友達」に対して連想する言葉に変容が見られた。これからの生き方について考え深めるためには，これまでの自分自身を振り返るだけでなく，未来の自分という立場から振り返り，これからの生き方について考えることも有効な手立てであると考える(写真 9)。

【写真 9　振り返りの内容】

４　研究のまとめ

（１）研究の成果

【表３　第２回目　「道徳科授業に関するアンケート」　令和５年 12 月 18 日(月)実施】
(4：よくあてはまる　3：あてはまる　2：あまりあてはまらない　1：あてはまらない)

質問項目	A 児		B 児		C 児	
	事前	**事後**	事前	**事後**	事前	**事後**
1.道徳科の授業で，自分の考えや意見を発表することが好きですか。	3	**3**	4	**4**	2	**4**
2.道徳科の授業で，話し合いをするのが好きですか。	3	**3**	4	**4**	2	**3**
3.道徳科の授業では，新たな気付きがあると感じますか。	4	**4**	4	**4**	3	**4**
4.授業の中でよく考え,自分の考えをもつことができていますか。	3	**4**	4	**4**	4	**4**
5.自分の考えを，みんなに伝えることができていますか。	3	**4**	4	**4**	3	**4**
6.友達の意見を聞いて，考えを深めたり広げたりすることができていますか。	4	**4**	4	**4**	3	**4**
7.これから，自分はどうしていきたいか考えることができていますか。	3	**4**	4	**4**	3	**4**

表３は，事前と事後の「道徳科授業に関するアンケート」の結果を示している。結果を見ると，どの質問項目においても「変容は見られない」あるいは「数値が上昇している」という結果となった。特に，質問項目３の「道徳科の授業では，新たな気付きがあると感じていますか。」は，C 児は１ポイント上昇した。質問項目６の「友達の意見を聞いて，考えを深めたり広げたりすることができていますか。」は，C 児は１ポイント上昇した。質問項目７の「これから，自分はどうしていきたいか考えることができていますか。」は，A 児 C 児ともに１ポイント上昇する結果となった。また，振り返りについて，子供たちは，道徳的課題を自分事として捉え，活発な対話活動ができている。また,養護助教諭が道徳科の授業に参加することで,多様な見方･考え方で捉えるきっかけとなり，昨年度の教育実践研究を踏まえ,「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した道徳科授業の在り方について追究することができたと考える。

○　導入において，各道徳科授業の中心となる問いをあらかじめ提示し，その内容を踏まえることで学習者主体の学習へ質的転換が図られ，主体的に共通課題をもって学習に取り組むことができた。
○　思考ツールや心のものさし等を活用したことは，物事を多面的・多角的に考えながら深めたり，多様な考えを視覚的に捉えたりすることによる，新たな気付きとの出会いのきっかけとなり，活発な対話活動を促す有効な手立てであることが明らかになった。
○　TV 会議システムを活用した合同授業を実践したことで，多様な意見や考えと触れ合えたり対話活動がより活発になったりして極小規模校における「主体的・対話的で深い学び」の有効な手立てであった。
○　事前と事後の変容を見取れるワークシートを活用し，それに基づいて振り返りを行ったことで，学びの深まりを実感することができ，これからの生き方について考え，実践意欲の向上へとつながった。

（２）今後の課題

●　対話活動や振り返りの場面で十分に時間を確保することができるように，発問や補助発問の精選が必要である。
●　極小規模校において合同授業は有効な手立てであるが，毎回，他島と合同授業を行うことは難しい。そのため，学習者主体の授業改善を意識し，綿密な授業計画・構想を立てることが必要である。
●　「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた文献等を概観すると，学級経営との相関関係を述べているものもある。より学習者同士が互いを認め安心しながら活発な対話活動を行うことができるように，学級経営の在り方について今後も追究する必要がある。

５　おわりに

今回，昨年度の教育実践研究を踏まえ，日頃から課題意識にしていた「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた道徳科の研究及び実践を行った。極小規模校のスタイルを確立するためにも，積極的な教育実践に取り組んだが，新たな成果と課題に出会い向き合うことができた。これからの社会を生き抜く子供たちが自信をもって未来を進むことができるように，本研究を通して得られた知見と成果及び課題を踏まえ，引き続き実践を重ねていきたい。本研究を進めるにあたり，多くの御指導・御示唆いただいた方々に感謝の気持ちでいっぱいである。そして，本学級の子供たちありがとう。

【参考・引用文献】

・鹿児島県総合教育センター(2017)　『指導資料第 32 号』
・坂本　哲彦 著(2018)　『小学校　新学習指導要領　道徳の授業づくり』明治図書
・文部科学省(2018)　『小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編』